

博士論文の要約

氏 名 金 子 馨

論文題目 藤原教長の口伝『才葉抄』の研究

日本文学や歴史史料など、書き残された書物をより理解するために、あるいは日本書道史における書跡や当時の書芸術観を考察する上で、当時の能書が書き記した入木道伝書(書論、書の秘伝書)に着目することは必要不可欠といえる。しかし、今日の研究では『群書類従』に収載される資料のように、江戸時代に流布した本文を用いて言及されることが多い。中古・中世(とりわけ、平安時代から室町時代)の書跡を考察する上で、時代の下った資料を用いることは、時代による合理化などが想定され、解釈の齟齬や誤解を生じることが懸念される。ゆえに、当該書跡が書かれた時期に、少しでも近くに書写された資料を用いることが肝要と指摘がなされてきた。ただし、「入木道三部集」と称される世尊寺家六代・藤原伊行(?~1175)著『夜鶴庭訓抄』、藤原教長(1109~1180?)の口伝を記した『才葉抄』、青蓮院流の祖・尊円法親王(1298~1356)著『入木抄』など、従前からよく知られている入木道伝書が研究対象とされるものの、これらの入木道伝書でさえ、未だ伝本整理すら、ままならない状況といえる。まして、日本中古・中世に書かれた入木道伝書を俯瞰的に捉え、体系的に論及した研究は現下において確認できない。

そこで、「入木道三部集」の一つで、平安時代後期の公卿・藤原教長より、世尊寺家七代の藤原伊経(?~1227?)へ口授された『才葉抄』に焦点をあて、その成立論について考察したい。内容は、第Ⅰ部「世尊寺家の入木道伝書と『才葉抄』について」、第Ⅱ部「『才葉抄』の各伝本の位置づけ」、第Ⅲ部「『才葉抄』の享受について」の三部構成で教長の口伝『才葉抄』の伝本やその享受について考察する。

第Ⅰ部「世尊寺家の入木道伝書と『才葉抄』について」の第一章「濫觴期における日本の書論について」では、濫觴期の日本書論史に着目し、書論の形成について考察するとともに主な書論の概要を辿る。第二章「世尊寺家の入木道伝書について」では、宮廷の書き役を担った世尊寺家の入木道伝書に焦点を絞り、教長の口伝『才葉抄』がどのような位置づけにあるかを探った。第三章「藤原教長と『才葉抄』について」では、古記録をはじめとする諸史料をもとに教長の生涯を辿り、とりわけ『才葉抄』が口授された晩年の動向について考察した。

『才葉抄』は、安元三(1177)年に高野山の庵室にて口授されたと伝えられる入木道伝書である。別名を「教長口伝」や「筆躰抄」、「筆法才葉集」などと呼ぶ。これまでの『才葉抄』の伝本研究では、教長口伝部分と増補部分とで構成される。それを基準に考えると、最善本とされる阪本龍門文庫蔵『宰相入道教長口傳』(以後、「龍門文庫本」)や江戸時代に流布した『群書類従』所収の『才葉抄』(以後、「類従本」)などの四十七条本系統、国書刊行会編『日本書画苑』に所収される八十八条本系統(『筆法才葉集』)、そして内閣文庫や静嘉堂文庫などに伝来する二十四条本系統の三種に大別される。ただし、古写本とされる四天王寺大学恩頼堂文庫蔵『筆体口伝』、鶴見大学蔵『才葉抄』は、項目数が若干異なるもの

の、その内容・構成から四十七条本系統に分類される。

『才葉抄』は、入木道伝書の中でも多くの写本が遺っており、諸所に約五十本の伝本が所蔵される。しかし、これまでいくつかの資料を取り上げて、伝本について言及した先行研究はあるものの、伝本すべてを調査・研究したものはない。これまで、言及される伝本分類においても、容易に鵜呑みに出来ない部分さえも見られる。現存する五十本の伝本は、前述の三種にそれぞれ大別できるが、四十七条本系統の伝本だけ見ても、項目数や配列など多岐にわたっている。とりわけ、承元三(1210)年の年紀を有する類従本と建武四(1337)年の年紀を有する龍門文庫本とを比較しても、配列の相違や異同が随所に見られる。各項目の内容に大きな差異は見られないものの、容易に校本が作成できない状況にある。そこで、第Ⅱ部『『才葉抄』の各伝本の位置づけ』では、五十本に及ぶ伝本の整理を行った。四十七条本は、類従本系統と龍門文庫本などの古写本系統とに分け、二十四条本系統、八十八条本系統の二系統を加えた四系統に区分して、それぞれに校本を作成した。系統ごとに校勘を行い、各系統における諸本の関係性を考察するとともに、『才葉抄』の形成に関わる伝本に関しては、個別に取り上げて言及した(第三章『『筆体口伝』について』、第四章『『教長卿口伝三十五条』について』など)。

本論文の最大の目的は、『才葉抄』諸本の校勘をもとに、『才葉抄』の成立論を考証することである。さらに、成立論を考察する上で、『才葉抄』がどのように享受されていたかを考えることも重要な問題と捉える。『才葉抄』は、基本的に教長口伝部分と増補部分とで構成(二十四条本は増補部分が独立したもの)されるが、『才葉抄』以外の書論(入木道伝書)を合写、あるいは共冊で伝来するものも少なくない。そこで、第Ⅲ部『『才葉抄』の享受について』では、『才葉抄』と合写(あるいは共冊)される入木道伝書を整理することで、享受の様相を探った。また、中世後半になると、注釈的な本文を有する『教長伝書之中』や、『才葉抄』ほかの入木道伝書を援引する尊円法親王『十三箇条之記』なども散見される。これらの入木道伝書との関連性について探ることで、『才葉抄』の成立論を考える一助とした(第二章『『教長伝書之中』について』、第三章『尊円法親王著『十三箇条之記』について』)。

なお、本論文のまとめとして、『才葉抄』の伝本研究から成立について言及し、歌論や書論が増補される性格を有していることから、項目数の少ない四天王寺大学恩頼堂文庫蔵『筆躰口傳』や『教長口伝三十五条』などが原書の形態に近いことを結論づけた。その結果を踏まえ、『才葉抄』の前半部分を教長口伝部分と想定するとともに、口伝の内容と教長の真跡との対比を試み教長口伝部分について若干の考察を加えた。